

# デモクラシー論理のアナトミア

高 瀬 学

## 一、本文

### I 仮説の提示

### II ヲオイコノミケークの内容とギリシヤク自由人々モデルの析出

### III 近代デモクラシーのアナトミア

## 二、注

## I 仮説の提示

阿部斉氏は小著「デモクラシーの論理」の中で、この政治原理に積極的な意味を見つけようとされている。<sup>①</sup>全く同感である。だが、我々が当面しているマス・デモクラシーは今日的な状況の関数であり、確かにギリシヤ・デモクラティアと異質的なものをもっている。<sup>②</sup>併しながら、果してデモクラシー論理の豊饒化のために、近代への連続性が否定されたままでよいものであろうか。否、それどころか、却って、かかるギリシヤ・デモクラティアの貝殻追放に似た排除こそ問題が存するのではないのか、本稿はこういった斜視的あまりにも斜視的なイロニア的視座からギリシ

ヤ人の生構造にアプローチを試み、その再構成を意図するものである。

ダローズ叢書の政治理論史を繙くと、ヘロドトスが、「ヒストリアイ」の第三巻80より82までで、かなり詳細に述べているオタネース、メガビュクソス、<sup>③</sup>ダレイオスの三人によつて繰りひろげられる政体論の中でオタネースの主張したイソノミアはデモクラティアであるとされているに出会う。<sup>④</sup>而もヘロドトスはこのイソノミアに一部のギリシャ人が自分達だけに独特な文化財との自負をもっていたという事実も付け加えている。<sup>⑤</sup>だから、通説的にデモクラティアは古代共同社会の一形態としてギリシャ人の生展開と即応しており、<sup>⑥</sup>その独自の生の与件に支えられていたと考えて誤りはないであろう。だが、更に一步踏み込んでその具体的な条件の分析に目をやると、近代での個分出、伝統的自然的共同体の崩壊に伴う構成性の必然といった視座が、ギリシャ人の生展開そのものにかかる近代性の欠格態を発見させ、この二重の意味での伝統的な接近姿勢がギリシャ人の生構造に消極的な吟味しか許さなかったように思われてならないのである。一体、古代デモクラティアを支えていたギリシャ人の生構図を、まさしく構造的に再構成し、これをデモクラシーの歴史の巨視的な軌跡に位置せしめた場合、本当に近代と非連続であるのか、この検討こそ必要であり、このためには、かかるギリシャ人の生構造のトルソをもつと鮮明に塑像化してゆく積極的なアプローチが前提とならざるを得ぬと考えるものである。抑々ギリシャ人の生に、いかなる構造モデルが抽出されるのか、そして次にこの析出されたモデルは果して近代といかなる意味において非連続なのか、この吟味こそ、ここでの作業仮説なのである。これまで真の意味での積極的なアプローチが欠けていたと思われるだけにノンサンスなものではないであろう。次のⅡ、Ⅲでこの作業仮説の各部について触れることにしたい。

「オイコノミケー」の内容とギリシャ「自由人」生モデルの析出

扱て、ここでは、ギリシヤにおいて文字通り、“人”であつた自由人の生構造モデルの析出を課題とするが、このためのサンプルとして、私人の存在に可成り照射をあてているアリストテレスの“オイコノミケー”をとりあげることにしよう。この三巻より成る、アリストテレスの名を冠した小著は、既に多くの学者が指摘するように偽書であり、而も各巻とも作者、成立年代を異にするものである。<sup>①</sup>だが、マクロにギリシヤ人の生モデル抽出を目的とする以上、アリストテレスの作でないことは毫末も作業への支障となるものではないので、唯だストア派の筆になる紀元後のものが一部混入している第三巻を、使用言語からも除外すると、大体成立年代も前四世紀より前第三世紀と考へて内容の検討に入つてゆけば十分であらう。<sup>②</sup>

さて、「オイコノミケー」の第一巻、第二巻を通観すると、執筆者を異にした事典風の体裁の中に、大体基線としては三部の構成をとっていると判断してよいであろう。すなわち、財政とそのそれぞれの部門に関して、正しい運営をするための全般的な心構えを説くねらいでオイコノミヤを王、サトラップ、ポリス、私人の四つの型に分類し、その各々に共通なもの、更にそれらの中にあつて特異なものこそ考察の眼を向けるべき対象であるとして、いわば四つの経済主体が営む財政の型を略図的に列挙してゆく第一部をなす類型比較論、この第一部を承けて、最小であるが、多様であり、変化に富んだイデオタイケをオイキアの財政であるオイコノミケーに接続し、その *system* について、考究の目を注ぐ第二部、更に形の上では第二巻の第二部をなしながらも、位相的にはこれまでの第一部、第二部の総

論に対し、オイキアの財政管理に関する実例挙示によって、各論的に四十一の実践事例を掲げている第三部がそれである。併し、ここでの目的はギリシヤ人生構造モデルの抽出にあるので、こういった本稿独自の作業仮説による自由的な個構図把握というフォーカスは自ら第二部に絞られ、付随的に第一部を参考にするといった結果にならざるを得ないのであって、少々羊頭狗肉の嘆はあっても、「オイコノミケー」の第一巻に構図抽出の場を求め、これを主たる対象とせざるを得ぬのである。従って以下の内容紹介も第二巻の第二部もまた割愛し、第一巻六節に及ぶ所論展開のみに焦点を合わせたものとなるわけである。そこで先ず、第一巻の叙述を各節毎に辿ってみよう。

筆者は第一節<sup>⑪</sup>で、ポリスを家、土地、財産の集合であり、立派に生活し得るため、自給自足を行なう共同体と定義するが、アリストテレスの政治学での行論展開とは異な<sup>⑬</sup>って、ポリスの部分を形づくり、その機能（エルゴン）を先行させるものを家と見ることになる。だから、ポリスを観察の対象とする政治学は家に分析的を絞るオイコノミケーをいわば前提とし、前者が多数の統治者、後者が一人の支配を扱う以外に、後者は前者に対して、基礎的な学問分野を形づくっていると結論し、オイコノミケーの重要性を強調することになるのである。第二節<sup>⑫</sup>は第一節でオイコノミケーに着目させるに至った定理ともいべき、最小部分への、ガリレオ・ガリレイのイル・メトード・アナリテイクに近似した分解的な発想を示し、これによって家をその構成部分である（*il part*）人と財物とに分け、財物をなす静態的要素に先ず目を向けるのである。筆者はここで、これらの財物への配慮は自然に即したものでなければならぬとの考えに立脚して、<sup>⑭</sup>鉱業、その他これに類似した各種のものよりも農業に高い評価を与え、個人の財政における最も重要な収入は土地からのものであるべきであると断ずる。<sup>⑮</sup>蓋し、農業こそ地に養いを仰いでいる人間にとって最も適したものとして、正しいものだからである。また、附随的に戸外で生活し、敵に対しても危険を冒させたりするた

め、男らしさを培う上でも大いに役立つという効果ももっている。<sup>(25)</sup> こうして大体はアリストテレスの政治学での見解を基線にして、クレーロス農民的な展開を下絵にした財物論を示し、家の動態的要素としての人間に関する配慮<sup>(27)</sup>に目を向け、次の二節に入るのである。ここでは、自然の目的である結合作出という原則を掲げ、このために女性は男性なしには、また男性は女性なしには存在し得ぬことになるので、共同生活は必然であり、他の生物に比べて最も完全な結合を有する人間にあっては、女性は男性よりも恐怖をもつことによって、男性よりも用心深く、警戒的であり、内なるものを保有し、より弱く、子女の教育面の分担に適するようにつくられている反面で、男性は、略々、この対極にあり、子供を産むのは共同でも、これを養うといった女性とは異った部門を相補うように受持ち、その他女性のないものを具えていると指摘する。<sup>(28)</sup> この男女の相補的な補完の場である共同生活を善いものとするための条件の吟味に次の第四節で入り、特に妻に対して夫たるべき者が守らねばならぬ掟を掲げ、夫婦の協調といった家政運営の要諦を実現するためにも妻以外の女と関係をもつことは、妻への不正であり、蔽に慎しむべきを力説し、ヘシオドスの言葉を引用して、できれば処女を娶り、その馴致によって夫婦の生活共同体を固めるべきであると忠告する。<sup>(29)</sup> こうして、家政運営の上で極めて重要な意義を帯有する、財産の動態的、人的要素である奴隷<sup>(30)</sup>をとりあげ、その取り扱いを第五節で少々詳細に論ずるのである。筆者はここで奴隷を監督と働き手の二種に分け、それぞれの範疇に即応した処遇を説くとともに、すべては自由民に適さわしい仕事を委ね得る奴隷の教育馴致にあることを明らかにする。<sup>(31)</sup> 特に奴隷の取り扱いに関しては仕事、懲罰、給養の三者とその関係に気をくばり、医業に携わる医師が有すべき配慮が必要である旨述べ、その他同種族の奴隷を多数手元におくべきではないこと、<sup>(32)</sup> また犠牲や娯楽も頻繁に与えねばならぬことなどを付言するのである。こうして最終節では家政家が財貨に関して具有すべき素質は、その獲得、保守、整

頓、利用の四つであるとし、総合的な心得を説くことになるのである。例えば、(i) 夫婦はできれば分担を定めて、その受持ち分野に検査を行ない、(ii) 奴隷たちよりも早く起きて、遅く眠りに就くことも必要であり、(iii) 収入についても小さい財産の場合にはアッティカ風の処理でもよいが、大きな財産にあつては、一年の支出と月々の支出とを峻別する会計処理が望ましいとする。更にその他、(iv) 道具の管理、<sup>(51)</sup> 家の設備、<sup>(52)</sup> 特にその健康と安楽さに着目した配慮の必要性、<sup>(53)</sup> (v) 什器の配置をとりあげているのである。これが、我々にギリシャ自由人の生モデル抽出の素材を提供すべき「オイコノミケー」の梗概なのである。

さて、今、その内容紹介を終えた六節に及ぶ、家という最小共同体をめぐって展開された、私人の財政を対象にした理論と実践の陳述である、この「オイコノミケー」第一巻の行論を通観して確認されることは、仮令大きな財産といつても、たかだか、夫婦の性的分業体を基軸にした、若干の奴隷抱合の様態を呈する、ヘシオドスのなガイアのヘロースに近似した、クレーロス農民像であり、こういった農民の土地収入の他に、その他の財産、貨幣よりの収益が付加される程度の、小規模な家計実存の現実である。そして、こういったオイコノミケーに鳥瞰される、ギリシャ的人間実存に対応する思考が、同じ事に役立ちながらも、相反した作用をもつ二元指定の論理図式であった。<sup>(55)</sup> 夫と妻、主人と奴隷、監督奴隷と働き手の奴隷の組み合わせこそ、その範疇的表白であると言えよう。ところで、自由人と奴隷のこれらの二元のペアの<sup>(57)</sup> 一つは、その中に非交換性の原則を含み、その限りにおいて大河文明地域に見られる、生の客観実存の非交換的並列に類似したものをもちつことは否定できず、後述するように、「自由人」の生構造モデルの修正的歪曲要因として作用することは確かではあるが、灌漑と肥沃な土地によって、老大な生産力を手にし得た大河に臨む地方が、社会群の分業を土台にして一般的奴隷制を展開し、そこに自由身分をも吸収したのに対して、苛烈

な自然条件の下、極めて生産性の貧弱な天水農業を人々に課することになった、ギリシャの地は、『オイコノミケー』が証言しているように、精々、家内奴隸制以上に出ることは許さなかったといつてよいであらう。<sup>59</sup> 厳しい自然との闘いを間断なく続け、ためにどうしてもガイアの英雄たることを余儀なくされたギリシャ・クレーロス農民は、必然的に自らを主体的に自由人として分出させ、自分自身の生が、自然の変化への明敏さを欠くことによって陥る虞れのある非連続化の危険と絶えず直面せざるを得なかったと言つてよい。彼は農民であると同時に、この『オイコノミケー』でも、その残滓が剖見せられるように、重裝兵として、同時に戦士の役割をも担わざるを得なかった。このように、いわば八面六臂の活動を、既にその自然的条件によつて強いられた自由人は、その生展開の過程に於て自らの生を連続化するためには、実に多くのことに意を用い、少くとも二つの象限に軌跡をもつ、文字通り多面的な構図を自身の実存の内部に措定せざるを得なかったのである。一見したところ、形式的には二象面を一応措定する点で、オリエント的生と些して怪誕ありとは思われぬ姿を呈しながらも、あれもこれもせねばならぬ、このギリシャ自由人の生投影図は、二元の関連化を必然ならしめ、かかる動態論を強制することによつて、非交換的な現実像のままに、一方に他のヴェクトルを吸着吸収する傾きをもったオリエントの論理構造とは、<sup>60</sup> 関連メカの増幅において一味ちがったものをもつていたと言ひ得よう。つまり、言葉を代えて表現するならば、ギリシャクレーロス自由民は生の実存そのものにおいて交換構造を余儀なくされており、これが『オイコノミケー』で抽出された、『二』のままで、『一』を求める二元の未吸着的措定並びにその関連化の論理への冒険企業的な衝迫をもたらした母胎であり、こういった生展開の構図こそ、我々が『失われし時』を求めて、探鉱をつづけてきたギリシャ人の生構造モデルであつたわけである。治者と被治者の相互交換性、牧者と羊の二重性に立脚したデモクラティアが、かかる交換メカニズムを帶有して

いる生モデルの先行指定を俟って始めて可能となるものであり、こういった構造性の投影でもあった。さればこそ、ヘロドトスも語る如く、ギリシャ人は、この生モデルの直観に依拠しつつ、デモクラティアこそ、彼らに独自の制度であるという奇妙な信念を抱くに至った根拠も潜むのである。それは兎に角、我々は「オイコノミケー」の第一巻をなぞることによって、かかるギリシャ「自由人」の独特な生構造モデルのより積極的なトルソを得ることになったわけであり、これをギリシャ・デモクラティアの支柱と見てよいのである。

### III 近代デモクラシーのアナトミア

ところで、IIで確認した、交換的構造を帯有したギリシャ生モデルはギリシャと異質な近代では消失するに至ったと断じ得るであろうか。近代思想の黎明を告げるルネサンスが古典古代、特にギリシャのまねびを志向した「再生」であり、また人口に膾炙している有名なジャン・ジャック・ルソーの表現にも示されているように、仮令投票の瞬間にせよ、主権者として統治機関の構成を行なう機会をもち、大規模社会の国民主権に内在する国民の主権性と政治機構の代表性による緊張関係<sup>①</sup>にたたせられ、普通選挙権への傾斜において、ギリシャ・デモクラティアに存した治者と被治者の交換メカニズムの拡散型を帯有するに至った近代人の生は構造的にいつて個多面体をなし、明らかに我々がIIで探りあてたギリシャ自由人の個内部に見られた交換構造性が、近代人の生構造のラムカをなしていることが窺われるのである。だから、ギリシャ的生の交換性は近代デモクラシーを支える人間類型構造の基底にも、消えることなく流れ続けていると断じ得るのである。



だが、他面、近代特にヨーロッパ近代は伝統的共同体分解のあとを承け、社会の枠組み自体を作り出さねばならぬという構成的な課題を担わされているので明らかにギリシャとは同一ではない。また、これまで合理的なものと非合理的なものとを巧みに組み合わせ使用分け、理解される妄想、対話可能な妄想という回路を具えていた人びとに合理性を座標軸として、これに適合せぬものを非合理とし、これらの非合理的思考への固執をはや了解不可能な妄想として抑圧し、そこに原始社会に未知な慢性病としてのスキゾフリーニア<sup>③</sup>を齎らすといった「新しさ」において、ギリシャを含めた伝統的共同社会の示す現象形態と異質なものを帯びていることは否めぬところである。つまり、非連続の象面も見られるわけである。では、この非連続性をどうように考えるべきなのだろうか。

ところで、このギリシャと近代の連続と非連続の関連について仮説的に結論を述べて貰うなら、次のように言い得るであろう。つまり、ギリシャ・デモクラティアと近代デモクラシーとは、その支持基体である、それぞれの個の生「モデル」内部に析出される交換構造そのものは治者・被治者の緊張的流動関係に立脚した制度を採る限り、内在的に連続しており、個の多面的な生実現における、既述した生次元の未吸着的な措置、従って、その最小求値的な二元の関連論理の作出を要請せざるを得ぬ、ギリシャ自由人の生モデルが近代人にもラムカとなっており、近代人は、この生モデルとこれに内在する次元関連のダイナミックスを、交換力学による政治制度たるデモクラティアをとっていることを媒介として、自己の課題とせざるを得ぬわけであり、ギリシャ人との生モデル共有による連続性を有し、ギリシャの延長線上にあるといつてよいのである。だから、ギリシャと近代の異質性は、このラムカの拋棄、生モデル自体の力学的ベクトルそのものの逆転に存するのではなくて、寧ろ同質の実存構造、従ってこの構造必然的な同一課題要請をラムカとしながらも、後述するところで明らかに如く、これらの構造と課題の所与現象形態

が、特殊、一般の關係にたち、ユークリッド幾何学と現代の代数幾何学の對比に望見される狀況で把握されるべきものではなからうか。<sup>④</sup>

では、ギリシャと近代に見られる、同一生モデルの特殊、一般といった定位は、より具体的に与えられた場合いかなるものと考えられるのであろうか。それはギリシャと近代における労働力の定在形態にその露頭をのぞかせているといつてよいであらう。つまり、周知のようにギリシャには奴隷制が存在した。ここにこれまで我々が「オイコノミケ」で抽出した交換構造モデルを唯、自由人のみの専有物たらしめ、このモデル自体を特殊化するに至つた基因が存在しているのである。既述した通り、奴隷制は自由人を奴隷に対する、この「声ある家畜」に対しての主人たらしめ、そこに非交換的な生構図を作出させる。この意味でギリシャ自由人生モデルは大河流域、就中オリエントとの親近性を帶有し、伝統的共同体との接合環をもつに至る。このため、ギリシャ的生展開はスフィンクス宛らに半人半獣の相を呈し、自由人の生構図内部にある交換構造は一般化する道を閉ざされ、潜在化されたのであり、これがギリシャ科学そのものをも矮小化させる結果を伴つたのである。つまり、ここに断面のある交換構造の特殊化こそ、交換構造実存が必然的に要請する、生次元の関連づけへの展望を萎縮退化させ、「二」のままで「一」に接合するという、靜態的、平面的な特殊論ではパラドックスとして放擲、断念せざるを得ぬ、解決困難な問題をゼノンのアキレスと亀の背理のままに放置し、「有限」<sup>⑤</sup>に安住させ、まさに英雄的な、この問題への積極的な取り組み方を拋棄させた真因だったのである。このために例えば女性と男性との相補性に関しても自然がそのように作つた。すなわち「*the Best*」によつて、夫と妻雙方はその本性上共同生活をするように定められているとする接合論理しか塑定できなかったのである。それはまさしく、共同生活を媒介項的な全体として措定する、アリストテレスの形式論理学に対応した、また

多くの平行線を引き得るとするリーマンなどの非ユークリッド幾何学にも背を向けたユークリッドの「ストイケイア」公準<sup>⑤</sup>に見られる吸着的な処理といつてよいものである。

ところが、これに対して近代は假令形式的にせよ、奴隷制といった経済外的強制を揚棄してゆく軌跡志向にあることは確かである。これは労働力の商品化による交換経済の全般的浸透を軸にした、ギリシャ自由人の生モデルに望見された交換構図の拡散を招来するものであり、その「一般」化を必然たらしめる動きであった。事実アダム・スミスによる社会的分業での国富形成の主張は産業革命を経て、現代ともいふべき二十世紀においてフォードシステムで大輪の花を咲かせた。このシステム化に窺われる生産工程分割は、その導入によってギリシャ自由人生内部に剖見された多面的構成を、社会展開過程を分割する縦横の網によって増幅し、複雑なものとするに至った。多くの歪みをもつ曲面が、ギリシャ的平面像に代替され、登場したといつてよい。生きるため、先ず労働力を売らねばならぬ新しい型の人間は、自分の生そのものの迂回的屈折的展開を強いられることになるのである。だから、かかる次元増幅による生の構造モデルにおけるギリシャ自由人型の拡散は、実存的生モデルの一般化を現出し、従つてこの構造モデル自体が、そのダイナミックスで必然的に内有していた次元関連論の作出そのものを構造的には既に一般化しており、ここでの「オイコノミケー」に一つの断面を見せていたギリシャ的な特殊論的处理、すなわちユークリッド的平面思考の通用力をもはや喪失させており、ギリシャ的な所与の論理は不十分な、揚棄されて然るべきものと化していったと言つてよいのである。この実存の一般化の関数たる関連の一般論、これこそデモクラシー論理を含めて近代的思想が取り組むべき真の課題だったのである。

併し、近代がこれまで現実に向つた道は前述したように慢性病としての分裂症定着といった病理的なものであつ

た。それは、ギリシャ自由人の生構造モデルに剖見される多面体構造実存を、実存底面において継承し、その次元増幅を果しながらも、ギリシャ自由人の生モデルに内有された交換構造存在とその次元関連論理の作出必然の有機的な絡みの一体的メカニズムには、その関連づけの論理象面の異質性を名分とした捨象によって顕在的、意識的には恣意的な切断が行われ、その歪曲化が招来されたためであった。ギリシャの生構造モデルの有機体的生理は、この畸型化によって著しくその機能が損なわれ、既にその出発点において生氣のない病理像を呈していたのであった。つまり、揚棄の拡大解釈による原型モデルの不当な倒錯を触媒にして、関連論理の作出を一般理論化してゆくという、これまで前例のない未知の課題、まさにギリシャ的発想のコペルニクス的転換なくしては、果し得ぬ作業から目を逸らし、徒らにベルトコンヴェアシステムに象徴される如く、ゼノンのアキレスと亀の背理宛らに定点間の分割といった遠心的な過程分割を媒介とした次元増幅に狂弄し、求心的な次元関連論理の一般化への対応という真の課題を忘失したところに近代就中ヨーロッパ近代が歴史的に辿った病理的な宿命の道が開けることになつたといえよう。この近代のもつ、ギリシャ生構造モデルへの斜視的なアプローチこそ近代人をして、増幅された次元の森の中で、ダンテのディヴィナ・コメディアの語るウォモ・ズマリートたらしめ、次の真の整序を不可能にしてしまったのである。このために、ある価値を前面に押し出し、そのプリマートによって、他のものを切り捨て、抑圧するという安易な方向をとらざるを得なくなるわけであり、この一つの現われが分裂症慢性化の素因ともなった合理的思考を錦の御旗に仕立て、他の次元価値を抑制、断圧してゆく「衣裳」思想であり、現代における価値多様化といった呪文も、この延長線上に位置しているといつてよからう。そこには明らかに藤沢令夫氏が指摘されるような、ギリシャにあった世界・自然のあり方を認識する〈知〉と人間の生き方や行為を導くべき〈知〉との相即性、その有機的一体性を暴力的に剝離し、

いわけば非本来的な分裂状況を呈さしめている近代思想構図のトルソが存していると思われてならない。つまり、私は、こういった近代が自らに課すべき真の課題、その本当の思想設計図を失念したところに、デモクラシーの論理にもこれを支えている人間の生モデルの構造論を欠かせ、この欠缺によって、論理を媒介としない、裸のエゴの跳梁を拱手して見る他ない小児病的デモクラシーの横行を許し、いわば失語症的な混乱を演出させている真の病因が生じたと見るのである。従って、下世話にもいう「急がば回れ」で、先ずデモクラシー論理形成のおかれている幼年期的早発的痴呆状況の確認によって、近代思想全般が取り組まねばならぬ真の課題が、ギリシャ自由人生モデル構造の一般化であることを正しく把握し、ユークリッドに代表される平面幾何学的特殊理論を曲面空間幾何学に転換、代替した数学に見られる方法を社会、人間科学的にリアレンジし、一般理論的構造学の作業日程を組む必要があるのである。平面を特殊曲面とする、リーマン的発想によって、平面的に見る限りはパラドックスとしか解し得ない事態にドン・ファン的な視線をおくり、人間科学の熟年化によって、デモクラシー論理をも成年期的状況に定位する、一見迂遠と見える、また未知の困難を孕む、この人間科学の一般理論化の道こそインドという「百の道は一つ」であるように考えられるのである。

## 注

### I

- ① 阿部 斉 デモクラシーの論理 中公新書 P・5
- ② 前掲 P・18～19
- ③ Herodoti Historiae (Oxford Classical Texts) I LIBER III 81 このL・200の脚注で *Μεγάλοος* という読み方もある旨示されているが、本文によつてここでは *Μεγάλοος* とする。

- ④ Georges Lescuyer Histoire der idées politiques S 12 P. 21~22 参照。  
 ⑤ 前掲 Herodoti Historiae II LIBER VI 43 3. 4 I LIBER III 80 2 上記の *Envoi*, *Epiphora* に注目のこと。

- ⑥ 阿部 前掲 P. 22

II

- ① 通常、経済学と訳されている (村川堅太郎 山本光雄 前者は河出書房版 アリストテレス全集 第十六巻 後者は岩波新書 アリストテレス P. 17) が、家政学という訳もあり (藤井義夫 アリストテレス P. 37) 村川堅太郎氏も訳書 P. 49 の註(1)で言及しておられる。このため敢えて邦語とせず原題通りとした。また偽作であることは、アリストテレスの政治学々と反対の考えが随処に散見され (村川 前掲 序 P. 149 註27) 更に第一巻と第二巻での用語にも例えは *polarchy* のように (Loeb classical Library OECONOMIA BOOK AI P. 326 BOOK B I P. 344) 差があるので別人の筆になったものと推定される (村川 前掲 序 P. 1 藤井 P. 37) 成立年代について、第一巻と第二巻は異なっており (藤井 P. 37) 第二巻も前半と後半の事例集が果して同一人のものか、著作年代もいつかについて争いがある。(村川 前掲 序 P. 158 註28 参照) 第三巻はラテン文であり、村川 前掲 序 P. 2 藤井 P. 37 に指摘された問題がある。だが、ここでのマクロな生モデル抽出にとつて、こういった考証は毫も支障となるものではなく、アリストテレス主張とは逆にオイコスへの着目によって私人財政を前面化していることは共同体への埋没性の稀釈によって、私の仮説論証には却って都合がよいとさえ言えるのである。尚お、オイコニケーの引用はすべて Loeb Classical Library の Aristoteles XVIII にやる。

- ② 村川 前掲 P. 58 註28 藤井 前掲 P. 37  
 ③ LOEB P. 348 L. 22~23  
 ④ LOEB P. 344 L. 7~P. 348 L. 21  
 ⑤ LOEB P. 344 L. 13~15  
 ⑥ LOEB P. 344 L. 1~P. 350 L. 2  
 ⑦ LOEB P. 344 L. 12

⑧ この LOEB P・344 L・7にある *oikonomía* その下位概念である *basarakh* の用語と LOEB P・326 L・2の *oikía* L・1 L・14の *oikonomakh* には明らかにその意味内包に前掲註II (1)でも言及したようにずれがある。

⑨ LOEB P・326~342

⑩ LOEBのテキストには事例毎のノンブルはなく、村川堅太郎氏の訳書が採用しているが、便利である。だが四十一の事例中「三七」「三八」「三九」「四一」はそれぞれ「二五」「三四」「三三」「二〇」の追補と見られるものがあり(村川 前掲 P・82 「三七」の註(1)参照)、実際には三十七である。また「二三」「二四」「三三」の事例はペルシアのサトラップに関連したものであり、バルカン半島のギリシヤよりも汎ギリシヤ性を帯びたものとして、若手の距離をおくのが至当と見られる。

⑪ LOEB P・326~P・328 L・7

⑫ LOEB P・326 L・13~14

⑬ アリストテレス 政治学 例えはその 1253<sup>a</sup>

⑭ LOEB P・328 L・4~5

⑮ LOEB P・326 L・1~5

⑯ LOEB P・328 L・3~4 L・6~7

⑰ LOEB P・328 L・8~P・330 L・8

⑱ LOEB P・328 L・9~10 特に *ἐνεί δὲ πρῶτον ἐν τοῖς ἐκχυρίσταις ἡ ψῆφος ἐκδοτὸν θεωρεῖται* 参照(1)と。

⑲ LOEB P・328 L・8~9

⑳ LOEB P・328 L・18

㉑ LOEB P・328 L・19~21

㉒ LOEB P・348 L・5~7

㉓ LOEB P・328 L・24~P・330 L・2

㉔ LOEB P・328 L・21

- ②5 LOEB P・330 L・3~8
- ②6 村川 前掲 P・50~51 〔二〕註1~6  $\nu\iota\gamma\iota\upsilon\sigma\tau\alpha\iota$  プリヌタレン政治学 1252 b 10 sq; 1253 b 1~8; 1258 a 21 ~ 24; 1258 a 35~37; 1258 b 8~22; 1258 b 37; 1319 a 21~24; 1337 b 8~11 を該箇所として列挙してゐる。
- ②7 LOEB P・330 L・9~10 特に  $\pi\epsilon\rho\iota$  τοὺς ἀνθρώπους と複数形表現である。
- ②8 LOEB P・330 L・9~10 P・334 L・133 まで
- ②9 LOEB P・330 L・11~13
- ③0 LOEB P・330 L・13~16
- ③1 LOEB P・330 L・19~23
- ③2 LOEB P・332 L・12~18
- ③3 LOEB P・332 L・18~21 と P・332 L・7~12 特にこの L・9 からの  $\delta\epsilon\lambda\eta\gamma\eta\tau\alpha\iota$  τῶν τῶ μη……  $\delta\lambda\lambda' \epsilon\mu\alpha$ ……の叙述は重要である。
- ③4 LOEB P・332 L・22~23
- ③5 LOEB P・334 L・2 P・332 L・23
- ③6 LOEB P・334 L・6~8
- ③7 LOEB P・334 L・14~16
- ③8 LOEB P・334 L・14~16
- ③9 LOEB P・334 L・17~18
- ④0 LOEB P・334 L・23~26 P・336 L・1  $\nu\iota\gamma\iota\upsilon \epsilon\pi\tau\epsilon\rho\omega\tau\omega\varsigma$  だが  $\epsilon\lambda\epsilon\upsilon\theta\epsilon\rho\omega\tau\epsilon\rho\omega\varsigma$  だと  $\tau\upsilon\mu\eta$  と  $\epsilon\pi\gamma\alpha\gamma\eta\varsigma$  には  $\pi\rho\omega\tau\eta\varsigma$  に対応する。
- ④1 LOEB P・334 L・19~21
- ④2 LOEB P・336 L・6~8
- ④3 LOEB P・336 L・18~21
- ④4 LOEB P・338 L・4~5



- ④5 LOEB P・338 L・6ゝ9
- ④6 LOEB P・338 L・10ゝP・342
- ④7 LOEB P・338 L・10ゝ16
- ④8 LOEB P・340 L・10ゝ12
- ④9 LOEB P・340 L・13ゝ19
- ⑤0 LOEB P・340 L・25ゝP・342 L・6
- ⑤1 LOEB P・342 L・1ゝ6
- ⑤2 LOEB P・342 L・7
- ⑤3 LOEB P・342 L・8ゝ9
- ⑤4 LOEB P・342 L・21ゝ24
- ⑤5 LOEB P・348 L・3ゝ4
- ⑤6 前註 ③参照。
- ⑤7 この非交換性の客観的化体が生産力の高い大河地域に見られる治者、被治者の片面的な分業固定であり、治者は治者である。インドにあったカースト制度はその最大値的な表現である。
- ⑤8 太田秀道 スバルタとアテネ 岩波新書 P・47ゝ52 また自然条件の苛烈さに関しては、ヘシオドスがクエルガカイヘーメライクでヘリオンの山に近いアスクラを豊かでない、冬も暑さも酷い呪われた村とよんでいることに注目のこと（六四〇行）
- ⑤9 LOEB P・330 L・3ゝ8 特にこの *εἰς τοὺς τοῦδε λόγους* 参照
- ⑥0 こういつた吸着性を最も端的に示した例がインド人の思惟方法であらう。中村 元 東洋人の思惟方法 1で博士は普通の重視、否定的性格、個物および特殊の無視、万物一体観、静止的性格、人格の主体的把握、個我に対する普遍我の優位、普遍者への随順、対象的自然界からの疎外、向内的性格、形而上学的性格、寛容宥和性などをあげておられるが、インド数学でのゼロの発見、バビロニアでのゼロの祖先への想到は示唆的である。
- ⑥1 前掲 註I (5)

III

- ① 松下圭一 市民自治の憲法理論 P・84 L・718
- ② 阿部斉 前掲 P・21122
- ③ 野田正彰 狂気の起源をもとめて 中公新書 P・18119
- ④ この表現はJ・M・ケインズが雇用、利子、貨幣の一般理論で古典派経済学者の所説を特殊理論と見たことと照応する。
- ⑤ 遠山啓 数学入門 下 岩波新書 特にP・59
- ⑥ ギリシヤの科学 世界の名著 9 中央公論社 P・256 尚お、ユークリッドのストイケイアという表現は本来エウクレイデスというべきものであるが、通俗的なユークリッドをここでは採用した。
- ⑦ 日本国憲法 第十八条参照 併し、北米合衆国の南北戦争、ブラジルにおける一八八八年五月の奴隷解放法案成立に至る経緯が物語っているように(山川出版社 世界現代史 33 P・148154) 決して坦々たる道ではなかった。また奴隷制度の歴史的諸相については Fernand Nathan: Les esclaves 参照の事。
- ⑧ この描出は J. K. Galbraith: The new Industrial state Second edition Ch. 2 The imperatives of technology I II P・30136 参照
- ⑨ 伊藤光晴 ケインズ 岩波新書 ここでケインズは古典派経済学の雇用理論にまだ剰余労働の決定権をもつ自営農民像が色濃く曳影していることに気づいている。特にP・1001101
- ⑩ 藤沢令夫 ギリシア哲学と現代 岩波新書 P・1941195
- ⑪ 人類の知的遺産 68 アインシュタイン P・141 尚お、もし立ち入った叙述は寺阪英孝編 現代数学小事典 P・2471271 参照
- ⑫ ホセ・オルテガ・イ・ガセーの解釈に準じて、ドン・ファン像を女の純粹理想型を求めるものと考えたい。